マナビエ
MANABIE

記述の設計図　第5部 仕上げ

U13　採点者の目で見直す

アドバンス

対象：高校2年・偏差値50

1. 要点（ルール）
2. 例題　評論（理由型）「遅く書く」
3. 練習1・練習2（採点して直す・解答らんつき）
4. 解答と採点表

要点　見直しのルール

R13-1　採点は要素の加点

記述は要素ごとの加点で採点される。最高配点は設問の核（直接の理由・変化後の心情・言いかえの中心）。文章の巧拙は、要素が入ったあとの差にすぎない。

R13-2　採点表（ルーブリック）を自作する

書く前に設問の型から要素を出し、10点を配る（核4・二段目3・対比や契機2・形1）。要素表の◎〇がそのまま採点表になる。公式の採点基準の「～があれば可」「～は不可」も、この形で読む。

R13-3　減点の型

①設問とずれる（意味内容を問うのに主張を書く）②条件違反（字数超過は採点対象外が多い／8割未満は要素不足の合図）③主述のねじれ・一文が長すぎる ④指示語・比喩・具体例のまま ⑤文末が問いと合わない。話し言葉・誤字・同語反復（――線部のくり返し）は部分減点。

R13-4　見直し5項目

①聞かれたことに答えた ②条件 ③主語と述語 ④具体化 ⑤文末。書き終えたら必ず〇×をつける。

R13-5　×が出たら工程にもどる

①→U05（問いを読む）②→U06（要素表）・U08（字数）③④→U07（文にする）⑤→U09～U12（型の文末）。

R13-6　自己採点は要素単位

模範解答と字面でくらべない。要素に線を引き、意味が同じなら得点とする。字面が同じでも意味がずれていれば得点にならない。

R13-7　5項目のあとに「根拠」を見る

5項目に全部〇がついても、本文と矛盾する要素や根拠のない要素があれば、その部分は0点で、全体の印象も下がる。要素ごとに根拠の段落が言えるかを最後に確かめ、言えない要素は外す（迷ったら要素表にもどる）。

ルールの番号（R13-〇）は、講座全体の通し番号です。動画・Webページ・このPDFで同じ番号を使っています。

例題　評論(理由型)「遅く書く」

① 授業の板書を写真に撮る生徒が増えた。黒板にスマートフォンを向ければ、一秒で、一字の漏れもなく記録が残る。手で書き写すより、はるかに速く、正確である。それでも私は、ノートは手で取ることをすすめている。

② 手で書くのは遅い。話し手の言葉を、聞いたとおりにすべて書き取ることはできない。だから書き手は、聞きながら、どれが大事でどれを捨ててよいかを選ばざるをえない。さらに、選んだ内容を、自分の手が追いつく短さに言いかえなければならない。

③ この「選ぶ」と「言いかえる」は、どちらも、内容をいったん自分の頭に通さなければできない作業である。何が大事かは、話の筋がわかっていなければ選べないし、短く言いかえるには、意味をつかんでいなければならない。手で書く遅さは、書き手に、理解することを強いるのである。

④ 写真は、この作業を飛ばしてしまう。記録は完全だが、その記録は、まだだれの頭も通っていない。あとで見返せばよいと思って撮った写真の多くが、二度と開かれないまま端末の中にたまっていくのは、そのためだろう。記録があることで、わかったような気になってしまうのである。

⑤ 同じことは、キーボードで講義を記録するときにも起こる。速く打てる人ほど、聞いた言葉をそのまま打ちこみ、何が大事かを選ばずにすませてしまう。画面を埋めた文字の多さにくらべて、あとで自分の言葉で説明できることが驚くほど少ない、という経験は、多くの人にあるのではないか。

⑥ もちろん、速く正確に残すことに価値がないわけではない。資料を保存したり、人と共有したりするには、写真のほうがすぐれている。しかし、学ぶとは、情報を手元に置くことではなく、自分の頭の中で組み立て直すことである。

⑦ その意味で、書くことの遅さは、欠点ではない。遅さが、考える時間をつくっているのだ。

問　――線部「遅さが、考える時間をつくっている」とあるが、なぜそう言えるのか。百字以内で説明せよ。

下書き(ある生徒の答え)　102字／100字以内

板書を写真に撮れば一秒で記録が残るが、手で書くのは遅いので、遅さが考える時間をつくっているから、手で書くほうがよくて、写真だと二度と開かれないまま端末の中にたまっていくだけで、わかったような気になるから。

採点すると　**0点**／10点　字数超過で採点対象外(0点)。字数内だったとしても、――線部のくり返しと具体例で、2点ほど。

解き方

1. **手順1　採点表を作る**
   「なぜそう言えるのか」＝意味内容型の理由(U10)。核:選ぶ・言いかえるは、内容を頭に通して理解しなければできない(③)4点／二段目:遅いのですべては書けず、選んで短く言いかえることになる(②)3点／対比:写真は理解を飛ばす・学ぶとは頭の中で組み立て直すこと(④⑥)2点／形1点。

2. **手順2　まず字数(②条件)**
   下書きは百字をこえている。採点者は中身を読む前に字数で止まる＝0点。見直しは字数から始める(R13-3)。

3. **手順3　5項目**
   ①「なぜ言えるか」に「手で書くほうがよい」という主張をまぜた ③「～から、～から」と文がつながりすぎ ④写真・端末の具体例のまま、――線部のくり返し。⑤文末は○。

4. **手順4　もどって直す**
   ④③×→具体例を消し(U07)、②→③の二段の理由に組み直す。②×(長い)→U08 で削る。背景(写真の長所)は入れない。

5. **手順5　根拠を確かめる**
   核の「頭に通さなければできない」は③、二段目は②、学ぶの意味は⑥。根拠の段落が言えない要素は無い(R13-7)。

見直し5項目チェック表(下書き)

見直し項目	下書きのどこが	どう直す(もどる単元)	判定
①聞かれたことに答えた	「手で書くほうがよい」という主張がまざる	「なぜ言えるか」の説明だけにする(U05)	×
②条件(字数)	百字をこえている	具体例を削り、二段の理由だけにする(U08)	×
③主語と述語	「～から、～から」と一文が長くねじれる	原因→結果の一本の文にする(U07)	×
④具体化(具体例)	写真・端末の具体例と、――線部のくり返し	抽象化して書く(U07)	×
⑤文末	「～から。」	そのままでよい	○

模範解答

直した答え(模範解答)　92字／100字以内

手で書くと話をすべては書き取れないので、聞きながら大事な内容を選び短く言いかえることになるが、それは内容を自分の頭に通して理解しなければできない作業であり、学ぶことそのものになるから。

採点表

採点表(要素ごとの配点)	点
核:選ぶ・言いかえるは、内容を頭に通して理解しなければできない	4点
二段目:遅いのですべては書けず、選んで短く言いかえることになる	3点
意味:それが学ぶ(頭の中で組み立て直す)ことになる	2点
文末が「〜から。」・具体例やくり返しが無い	1点
合計	**10点**

減点の型(こう書くと)	何点になる？ なぜ？
百一字以上(この下書き)	字数超過。採点対象外(0点)。
「遅さが考える時間をつくるから。」	——線部のくり返し(同語反復)。0点。
「写真は二度と開かれないから。」	具体例・対比の一部だけ。2点ほど。
②だけ(「すべては書けず、選んで言いかえるから。」)	なぜそれが「考える」なのか(③)が無い。3点。

練習1　小説(気持ち型)「代役」

① 文化祭の三日前、主役の美咲が足を痛め、舞台に立てなくなった。代役に指名されたのは、照明係をしていた凛だった。稽古を毎日見ていたので、台詞はほとんど覚えている。けれど凛は、人前に立つのが何より苦手だった。

② 「わたしには無理です。美咲みたいに声も通らないし」

③ 凛はそう言ったが、部長は首を横に振った。「台詞が全部入ってるの、凛しかいないんだよ」。断る理由を、凛はそれ以上見つけられなかった。

④ 稽古が始まっても、凛の声は客席の後ろまで届かなかった。演出の先輩が「もう少し大きく」と言うたびに、凛は美咲の声の出し方を思い出して、そのとおりにまねようとした。まねようとすればするほど、台詞は自分のものではなくなり、喉の奥でつかえた。

⑤ その日から、凛は毎晩、鏡の前で台詞をくり返した。けれど、声を出すたびに、客席で笑われている自分の姿が浮かんだ。美咲ならここで声を張る、美咲ならここで振り返る。凛の頭の中で鳴っているのは、いつも美咲の声だった。稽古場の窓からは秋の澄んだ光が差しこんでいたが、凛の目には入らなかった。

⑥ 前日の夜、松葉杖をついた美咲が稽古場に来た。最後の場面を通し終えた凛に、美咲は言った。「わたしのまねをしなくていいよ。凛の声、小さいけど、ちゃんと届いてる。あの場面の主人公は、本当は凛みたいに迷う子なんだと思う」

⑦ 凛は、しばらく何も言えなかった。美咲は、自分よりも先に、この役の中にいる凛を見ていたのだ。

⑧ 本番の朝は、どしゃ降りの雨だった。体育館の屋根を打つ雨音を聞きながら、凛は舞台袖で台本を閉じた。もう、美咲の声は頭の中で鳴っていなかった。幕の向こうのざわめきに耳をすませながら、凛は、自分の声で最初の台詞を言う瞬間を待っていた。

問　――線部「自分の声で最初の台詞を言う瞬間を待っていた」とあるが、ここに至るまでに凛の気持ちはどのように変化したか。百字以内で説明せよ。

下書き(ある生徒の答え)　61字／100字以内

本番の朝はどしゃ降りの雨で不安だったが、美咲に勝てるという自信がわき、早く本番になってほしいとわくわくする気持ちになった。

採点すると　**1点**／10点　変化の形(～だったが～になった)の1点だけ。雨＝不安は情景の決めつけ、「美咲に勝てる」は根拠なし(本文と矛盾)、契機も無い。

① 下書きを採点し、見直し5項目で×をつけよう

見直し項目（①〜⑤）	下書きのどこが	どう直す（もどる単元）

② 直した答えを書こう

									10										20
									30										40
									50										60
									70										80
									90										100

100字以内（1マスに1字。句読点も1字）

練習2　評論(説明型)「わかりあえなさから」

① 私たちは、話せばわかりあえると信じている。意見がくいちがえば、言葉を尽くして説明し、相手が納得するまで話しあう。わかりあうことが対話のゴールであり、わかりあえないのは、どちらかの説明が足りないからだ、と考えがちである。

② しかし、他者とは、そもそも私とは別の身体を生き、別の記憶を抱えた存在である。同じ夕焼けを見ても、ある人はふるさとを思い出し、別の人は失った人を思い出す。どれほど言葉を尽くしても、相手の感じていることを、そのまま私が感じることはできない。

③ だとすれば、「わかった」と言い切ることは、ときに相手に対して乱暴なふるまいになる。相手の経験を、自分の知っている経験に置きかえて納得してしまうからである。「その気持ち、よくわかるよ」という言葉が、かえって相手を遠ざけることがあるのは、そのためだ。

④ たとえば、長く病気とつきあってきた人が、その苦しさを語ったとする。聞き手が、自分の短い入院の経験を持ち出して「わかるよ」と答えたとき、語り手は、自分の経験がひとまわり小さな型に押しこめられたように感じるかもしれない。わかってもらえたという安心より、わかられてしまったという寂しさが残るのである。

⑤ それでは、他者とわかりあうことはあきらめるべきなのか。そうではない。大切なのは、わかりあえないという事実を、対話の終わりではなく、はじまりに置くことである。

⑥ わかりあえないと知っている人は、相手の言葉を急いで自分の型にはめこまない。わからない部分をわからないまま受けとり、もう少し聞かせてほしいと問いを返す。そのとき対話は、結論にたどりつくための手段ではなく、相手との間に、少しずつ通い路をつくっていく営みになる。

⑦ わかりあえなさは、対話をさまたげる壁ではない。それは、他者が他者であることのしるしであり、私たちが問いつづける理由なのである。

問　――線部「わかりあえなさは、対話をさまたげる壁ではない」とあるが、なぜそう言えるのか。本文全体をふまえて百二十字以内で説明せよ。

下書き(ある生徒の答え)　53字／120字以内

話せばわかりあえるので、言葉を尽くして説明し、相手が納得するまで話しあえば、わかりあえなさはなくなるから。

採点すると　**0点**／10点　①段落の「多くの人の考え」を筆者の考えとして書いた＝本文と矛盾。0点。字数も8割(96字)に足りない。

① 下書きを採点し、見直し5項目で×をつけよう

見直し項目（①〜⑤）	下書きのどこが	どう直す（もどる単元）

② 直した答えを書こう

10 20
30 40
50 60
70 80
90 100
110 120

120字以内（1マスに1字。句読点も1字）

解答と採点表

練習1　小説(気持ち型)「代役」

解き方

1. **手順1　採点表を作る**
   心情の変化(U12)。変化後(自分の声で演じようと、落ち着いて本番を待つ)4点／変化前(人前が苦手で、美咲のまねをしなければと不安)3点／契機(美咲に、まねしなくていい・声は届いていると言われた)2点／形1点。
2. **手順2　5項目だけでは見つからない**
   下書きは①変化を答えた ③主述 ④具体化 ⑤文末が○。②は61字で8割(80字)に足りない＝要素がぬけている合図。
3. **手順3　根拠を見る(R13-7)**
   「雨で不安」＝情景だけで決めた(⑧の雨の中で凛は落ち着いている)。「美咲に勝てる」＝本文のどこにもない。勝ち負けではなく、まねをやめたのが変化。どちらも0点。
4. **手順4　もどって直す**
   要素表にもどり、変化前(①④⑤)・契機(⑥⑦)・変化後(⑧)を根拠の段落つきで並べ直す(U06・U12)。

見直し5項目チェック表(下書き)

見直し項目	下書きのどこが	どう直す(もどる単元)	判定
①聞かれたことに答えた	変化の形にはなっている	そのままでよい	○
②条件(字数)	61字＝8割の80字に足りない	要素表にもどる(U06)	×
③主語と述語	ねじれは無い	そのままでよい	○
④具体化	たとえ・指示語は無い	そのままでよい	○
⑤文末	「～気持ちになった。」	そのままでよい	○
＋根拠(R13-7)	雨＝不安は情景の決めつけ／美咲に勝てるは根拠なし	言動から取り直す(U12)	×

模範解答

直した答え(模範解答)　94字／100字以内

人前に立つのが苦手で、主役の美咲のまねをしなければと不安だったが、まねしなくていい、声は届いていると美咲に言われたことで、自分の声で演じればよいと思え、落ち着いて本番を待てるようになった。

採点表

採点表(要素ごとの配点)	点
変化後:自分の声で演じればよいと思え、落ち着いて本番を待つ	4点
変化前:人前が苦手で、美咲のまねをしなければと不安	3点
契機:まねしなくていい・声は届いていると美咲に言われた	2点
「〜が、〜ようになった」の変化の形	1点
合計	**10点**

減点の型(こう書くと)	何点になる？ なぜ？
下書き(雨で不安→美咲に勝てる)	情景の決めつけ・根拠なしで、1点。
「落ち着いて本番を待てるようになった。」	変化後だけ。4点。
「部長に無理やり代役にされて腹が立ったが、〜」	本文に根拠が無い(断る理由が見つからなかっただけ)。その部分は0点。

練習2　評論(説明型)「わかりあえなさから」

解き方

1. **手順1　採点表を作る**
   意味内容型の理由(U10)。核:わかりあえないと知る人は、相手を自分の型にはめず、問いを返しつづける＝対話がはじまる(⑥)4点／前提:他者は別の身体と記憶を生き、感じていることをそのまま感じられない(②)3点／対比:「わかった」と言い切ると相手の経験を自分の経験に置きかえる(③)2点／形1点。
2. **手順2　矛盾を最初に見る(R13-7)**
   下書きの「話せばわかりあえる」は①段落＝筆者が「考えがちである」と退けた考え。筆者の主張と逆なので、ほかが合っていても0点。
3. **手順3　5項目**
   ②53字で8割(96字)に足りない ①「本文全体をふまえて」になっていない。③④⑤は〇でも、点は入らない。
4. **手順4　もどって直す**
   要素表にもどり、②(前提)→③④(対比)→⑥(核)の順に、筆者の考えだけで組み直す(U06・U11)。⑦の「しるし」「理由」は比喩的なので、⑥の中身で言いかえる。

見直し5項目チェック表（下書き）

見直し項目	下書きのどこが	どう直す（もどる単元）	判定
①聞かれたことに答えた	①段落だけで、本文全体をふまえていない	②③⑥から要素を取る（U05）	×
②条件（字数）	53字＝8割の96字に足りない	要素表にもどる（U06）	×
③主語と述語	ねじれは無い	そのままでよい	○
④具体化	たとえ・指示語は無い	そのままでよい	○
⑤文末	「～から。」	そのままでよい	○
＋根拠（R13-7）	筆者が退けた考えを書いた（矛盾）	筆者の主張の側から書き直す	×

模範解答

直した答え（模範解答） 110字／120字以内

他者は別の身体と記憶を生きており、その感じ方をそのまま感じることはできないが、そう知る人は相手の言葉を自分の型にはめずに問いを返しつづけるので、わかりあえなさは対話を終わらせず、相手との通い路をつくるはじまりになるから。

採点表

採点表（要素ごとの配点）	点
核：わかりあえないと知る人は、相手を型にはめず問いを返しつづける（対話のはじまり）	4点
前提：他者は別の身体と記憶を生き、感じていることをそのまま感じられない	3点
対比：「わかった」と言い切ると、相手の経験を自分の経験に置きかえてしまう	2点
文末が「～から。」・比喩（壁・しるし）を言いかえている	1点
合計	**10点**

減点の型（こう書くと）	何点になる？ なぜ？
下書き「話せばわかりあえるので、～」	本文と矛盾。0点。
「わかりあえなさは壁ではなく、しるしだから。」	比喩のまま・――線部の言いかえだけ。0点。
②だけ（「他者の感じ方はそのまま感じられないから。」）	なぜ壁ではないのか（⑥）が無い。3点。

マナビエ
MANABIE

記述の設計図　U13 見直し（アドバンス）

© MANABIE　無断転載・複製・改変・再配布を禁じます